
IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

岩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

【Nコード】

N7277Y

【作者名】

岩田

【あらすじ】

“女性にしか反応しない”、世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」（アイエス）の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。そんな中ISを動かした男子がいた……。しかしその内一人は普通の男子……。なのか？なにやら女の子のように見えるが……。アドバイス、意見、感想など募集します。

Story 1 自分ともう一人以外は全員女子

インフィニット・ストラトス・・・通称IS・・・。

篠ノ之博士画開発したパワードスーツで、現代兵器を大きく上回った性能を持ち、最強の起動兵器ともいえる・・・。しかしISはなぜか女性にしか反応せず、今の世の中は女性が優位な社会で、今まで優位だった男性は格下になった・・・。しかし、女性にしか反応しないISだが・・・例外はある・・・。

そう・・・世界でISを扱える男子が・・・二人も現れたのだ・・・

「・・・・・・・・・・」

ここは日本にある『IS学園』・・・

今日は入学式と言うわけで賑やかであった・・・

その正面門に僕はいた・・・

背丈は普通なくらいで、首のうなじまで伸ばした髪の色はオレンジで、途中の辺りから紐で結んで束ねていた。瞳の色はサファイアのように青く、その顔つきもかわいらしい女の子・・・のようであった。着ているのはIS学園の制服で、元々女子しか通わないと言うことで特注の男子の制服である。

「・・・なんて言うか・・・どうしてこうなったんだろうね・・・」

と呟いて、男子・・・近衛スバルはIS学園へと入っていく・・・。

そもそもの発端は一ヶ月前のことであった・・・

「うう・・・寒い・・・」

一段と寒かったその日にスバルは高校の試験会場に向かっており、試験会場の近くの駅に着いた。

「いよいよか・・・全力で行こう」

と、駅から出て、スバルは試験会場に向かう・・・

「・・・ええと・・・どこかな・・・？」

スバルはメモを確認しながら建物に入ったものも、どこなのか分からず、人気があんまりない廊下にいた。

「・・・おかしいな」

そして建物内を進んでいくと・・・

「どうしたの？」

と、曲がり角から声がした。

スバルは振り向くと、そこにはなにやら怪しげな人物がおり、黒いコートを着て、フードを深々と被って顔が見えなかった。

「ええと・・・試験会場にはどうやって行けばいいんでしょうか？
どうもメモが違うみたいで」

「そつか・・・。だったらこの先を進んでいって、二つ目の曲がり角を右に行けばいいよ」

「そうですか・・・。ありがとうございます」

と、スバルはお礼を言って怪しげな人物が言ったほうへと歩いていく。

「・・・フッフ・・・作戦成功・・・」

と、その人物はフードを取って、中に入れていたピンクの髪を出した。

「私の期待通りになってね・・・スバル君」

と、その人物・・・篠ノ之束は姿が見えなくなったスバルにウインクした。

「さてと・・・私はこれで・・・」

束は再びフードを被って、その場を去った・・・

「・・・ここで・・・いいんだよね？」

スバルは言われたとおりに進んでいって、ドアの前に立っていた。

「でも人気がないような・・・まあ入ってみれば分かるかな」

と、スバルはドアを開けて中に入る。

「・・・誰もいない・・・」

中に入ったものも、誰もおらず、少し薄暗かった。

「・・・間違いか・・・。ん？」

と、出ろつとしたとき、目の端に何かが映った。

「あれって・・・」

スバルは向き直ってそれを見た。

「・・・IS？」

部屋の奥には一体のISが置かれていた。

「・・・ISか。確か女性にしか反応しない兵器・・・まあ僕は外見女の子のように見える・・・って言っても・・・関係ないか・・・」

「

スバルはISに近付いて辺りを見た。

「なんだか・・・凄いなあ」

と、スバルがISに触れた瞬間・・・

「!？」

ISに触れた瞬間、スバルの頭の中に膨大なデータが流れ、手元ではISから光が出ていた・・・しかもかなり強い光であった。

「・・・まさか・・・動くの？」

と、思っていたら・・・

「君！勝手に入ったらだめ・・・って、これは・・・？」

すると関係者が三人入って来たものも、スバルの手から放たれる光に驚いていた。

「ISが大きく反応している？ばかな・・・ここまで反応する『女子』はいなかったぞ」

(・・・僕・・・男の子なんだけど・・・)

外見が可愛い女の子に見えるので初見の人は必ず間違える。

「・・・しかも試験リストにはいません。どういうことでしょうか」

「分からない・・・。君・・・ちょっといいかな」

と、スバルは関係者に色々と事情を聞かれた・・・

その後IS適性の検査を行われて、IS適正の中では一番高い『S』を出して、驚かれた。更に男だと言うことが分かって更に驚かれた。(そりゃ驚くか・・・)。話によれば僕はISを使える男子二人目らしい・・・。そして強制的にIS学園への入学手続きが行われた・・・

そんでもって今に至る……

「初めまして……。私がこのクラスの副担任をします『山田真耶』と申します」

と、教室で副担任の自己紹介が始まった……

クラスは一組で、スバルは左から3列目の一番前の席に座っていた。

（……この人が……。世界で初めてISを動かした……。織斑一夏君か……）

スバルの隣には織斑一夏が座っていた。しかし女子からの視線が気になっているのかなんとなく落ち着きがない。

（まあ僕も同じなんだけどね……）

スバルも女子からの視線に気になっていた。

「……くん……。織斑君っ」

「は、はい！」

すると山田先生に呼ばれて、一夏は少し裏返った声で答えた。

そそれによつて女子生徒からくすくすと静かな笑いが聞こえた。

「あつ。ごめんね……。大声出しちゃって。でも自己紹介があつて、『あ』から始まって今『お』なんだよね……」

「そ、そうですね・・・」

と、一夏は席を立った。

「お、織斑一夏です・・・。よろしくお願いします」

と言うと、女子生徒の目が光った。

（うわぁ・・・物凄い期待の目・・・）

スバルはそう感じて、一夏のほうを見る。

「・・・・・・・・・・」

一夏はしばらくして、深呼吸して・・・

「・・・以上です！」

ドカァァッ・・・・・・・・！！

と、女子人一同倒れた。

「え？・・・お、俺何か悪いことと言った？」

すると、黒いスーツを着た教師が入ってきて、一夏の頭を出席簿で叩いた。

「ぐえっ！？」

「全く……。朝から何を言うと思えば……」

と、その教師はため息をついた。

「あつ、織斑先生。会議は終わったのですか？」

「ああ。代わりをしてもらってすまない山田先生」

と、織斑先生と呼ばれる教師は山田先生に代わって教卓に立つ。

「私がこのクラスの担任をする『織斑千冬』だ。私の役目はお前たちひよっこを一人前に仕立て上げることだ」

と言うと……

「きゃああああ！！本物の千冬様よ！」

「本物だ！私あなたに会うために九州から来ました！」

と、女子陣から盛大な声が響いた。

「全く……。いつも私のところには厄介なものが入ってくる……。これだから新学期は好きじゃないな」

と言うと……

「きゃあああ！千冬様！」

「もっと罵って！」

と、再び女子陣の声が響く。

（凄い……。織斑千冬……。いまだに人気なんだね。・）

スバルは女子の反応から凄い人だと改めて思った。

「・・・千冬姉がクラスの担任？」

一夏はなぜか理解できていない様子だった。

「・・・で、お前は満足にもあいさつができないのか」

と、織斑先生は左の拳を右手に叩きつけて一夏に向いた。

「い、いや・・・千冬姉・・・」

すると織斑先生は一夏の頭を掴むと机にたたきつけた。

「織斑先生だ」

「は、はい・・・織斑先生・・・」

「え？織斑君って千冬様の弟？」

「もしかしてISを使えるのもそれが関係しているのかな？」

「いいな。変わって欲しい」

と、女子のひそひそ話しが始まった。

「静かに」

と、織斑先生は手を叩いて生徒を黙らせた。

「今日からお前たちには半年でESの基本知識を身につけてもらう。いいな？良くななくても返事をしろ」

「はい！」と生徒は一斉に返事した……

そして休み時間……

教室の外では他の学年の生徒が見に来ていた。

そんでもって、スバルの周りには数人女子生徒がいた。

「ねえねえ……。近衛君ってハーフっぽい顔しているよね」

「あ、それ私も思ったの」

と、スバルの容姿のことに聞いてきた。

「う、うん……。僕のお父さんがイギリス人で、お母さんが日本人なの……。名字はお母さんのほうなんだけどね」

「へえ……。でも近衛君って女の子みたいよね」

「ははは……。よく言われるんだよね……。まあ慣れているけどね」

と、スバルは苦笑いした。

「そうなんだ……。でも私最初女の子かと思った」

「そうそう。私もそう思ったの……。でも男子の制服を着ているから男子だって分かったんだけどね」

と、話は盛り上がっていた。

そうして時間は過ぎて夕方四時半……

「はぁ……。何だか慣れないなあ」

スバルはそう呟きながらも寮の廊下を歩いていた。

ちなみにさっきまで多数の女子生徒がついてきていた……。

「ええと……。ここだよね」

と、スバルは手にしていたメモを見た。

ドアの上には『1543』と書かれたプレートが張られていた。

「さてと」

そしてスバルはドアを開けて部屋に入った。

「へえ・・・結構広いんだね」

スバルは部屋の中を見ていた。

そして部屋の中央辺りに来たとき、後ろのシャワールームのドアが開く音がした。

「あら？誰が入っているの？」

と、女子の声がしてスバルは焦った。

「あつ、この部屋と同室になる人ね。さっきまでシャワー浴びていたの・・・今行くね」

「え！？ちょ、ちよつと」

と、シャワールームから一人の女子が出てきた。

「・・・え？」

「・・・あ」

そして二人の目が合い、しばらく沈黙が続いて・・・

そんでもって女子の顔が見るうちに赤くなって・・・

「きゃあああ！！！」

と、悲鳴を上げてスバルに一発拳を入れた。

「ぐへっ！？」

それによつてスバルは後ろに飛ばされた・・・

「・・・いてて・・・いきなり殴るなんてひどいよ」

と、スバルは殴られた頬をさすっていた。

「う、うるさい・・・あんな場面で入ってきたあなたが悪いんですよ」

と、女子はドライヤーで髪を乾かしていた。

銀色の髪をして、瞳の色は水色をしていた。更にこの年には少し似合わないくらい胸が大きい。

「いや・・・シャワーを浴び終えた後だから音に気付かなかったんだよ・・・分かるわけないよ」

「・・・ま、まあ言えているわね」

そして女子はスバルのほうに向き直る。

「・・・あなた・・・近衛スバルでしょ？」

「え？知っているの？」

「知っているって・・・同じクラスでしょ」

「あつ・・・そういえば・・・」

スバルは教室でこの女子を見かけたことを思い出した。

「それで、君の名前はなんていうの？」

「・・・ゼオラ・・・ゼオラ・シュバイツァーよ」

「ゼオラか・・・まあルームメイトとしてよろしくね、シュバイツァーさん」

「ゼオラでいいわよ・・・呼びにくいでしょ」

「そ、そうなんだ・・・じゃあ改めてよろしく・・・ゼオラ」

「ええ。まあさつき殴ってゴメンね・・・でももうあんなことは無しよ」

「う、うん・・・なるべく気をつけるよ」

そうして二人は握手を交わした。

そして次の日・・・

「おはよう・・・ゼオラ」

「う、うん・・・おはよう」

寮の食堂でスバルとゼオラはあいさつした。

「隣いいかしら？」

「うん、いいよ」

スバルは隣の席にゼオラを座らせた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・もしかして・・・朝に弱いのか？」

「うん・・・。朝って中々起きれないの・・・」

「そうなんだ・・・」

と、スバルはクロワッサンをかじる。

「まあ人っているいろいろあるよね……。僕も色々な人を見てきたから別に気にしていないよ」

「そ、そう・・・」

と、ゼオラはマーガリンをトーストにつけて食べた。

「じゃあ僕は先に行っているね」

「うん……。また後でね」

そうしてスバルはゼオラに手を振って一足先に食堂を出た・・・

「ちょっとよろしくて?」

「え?」

一時限目の授業が終わって休み時間になったとき、スバルはとある女子生徒に声を掛けられた。

金髪のプロンドヘアーで碧眼の女子で、優雅さが見て取れる。

「近衛さんですね」

「・・・そうだけど・・・。ええと・・・確かセシリア・オルコッ

トさん・・・でしたっけ？」

「あら・・・このわたくしを知っているなんて・・・褒めて差し上げますわ」

「いや・・・。昨日織斑君に大声で問いかけていたし・・・」

昨日セシリアと言う女子は隣の一夏に声を掛けていたので、スバルは耳を傾けていた。

「うつ・・・そうでしたの・・・まあいいですわ・・・。織斑さん
と比べるとあなたは少しましのほうですわね」

「どういうこと？」

「織斑さん比べるとあなたは物分りが良いことですわ」

「そうなんだ」

「・・・馬鹿にしていらっしゃるの？」

「いや・・・別にそんなことは・・・」

「まあいいですわ・・・。しかし織斑さんも教官を倒したと言つこと
ですが・・・あなたもそれは——」

「僕も倒したけど？」

「な、なんですって？」

セシリアは驚いた様子であった。

「いや・・・僕も教官を倒したけど」

「あなたも教官を倒したと言っのですか!？」

と、セシリアはスバルに迫る。

「う、うん・・・。なんていうか普通に戦っていたら・・・って、
落ち着いて」

「これが落ち着いていられると思っっているのですか!？」

「な、ないかな・・・」

「だったら――」

すると予鈴が鳴り出した。

「うつ・・・。話はまた後でしますわ・・・。それまで逃げないこと
です」

と、セシリアはスバルに指差した後に自分の席に向かう・・・

「・・・な、何なんだろう・・・?」

スバルは目をぱちくりさせて、次の授業の準備に入る・・・

「ではSHRに入る……。まず一つ決め事をやらないといけない」
そうして授業も全部終わって帰りのSHRになった。

「近々学園で行うクラス対抗戦についてだ。クラスから代表一名を決めなくてはいけない……。誰を推薦する」

「はい！織斑君がいいと思います」

「え？」

「私は近衛君がいいと思います」

「へ？」

と、次々と二人の名前が挙がっていく。

「織斑と近衛か……。他に推薦するやつはいるのか」

「異議ありですわ！」

と、勢いよくセシリアが席から立ち上がった。

「クラス代表にこのわたくしセシリア・オルコットがなりますわ！男に任せるなんて笑止ですわ」

「……………」

「…………まあいいだろう……。代表候補は三人か……。なら織斑、

近衛、オルコットの三名は来週第三アリーナにて代表決めを行う．．
それまで各自で準備をしておけ」

（．．．なんだか．．いきなり凄い展開になりそう．．．）

そうしてSHRは終わった．．．

「それにしても．．．いきなり代表候補に選ばれるなんて、やっぱり男子だからかな」

「うーん．．．そうだろうね．．．」

そしてスバルは寮の部屋にてゼオラと話しをしていた。

「でも、オルコットさんと戦うのは結構厳しいよ」

「そうなの？」

「そりゃそうよ．．．イギリスの代表候補生なのよ？候補生に選ばれるってことは相当な腕を持っているってことよ」

「そうだよね．．．オルコットさんのあの自信からすればそうだろう」

うね」

「・・・どうするの?」

「・・・何とか少しでも戦えるようにしないといけないから、明日の放課後に第四アリーナでISの動きとか教えてくれる?」

「わ、わたしが?」

「うん・・・。ゼオラも専用機持ちって言っていたしね」

「ま、まあ・・・そうだけど・・・」

と、ゼオラは首に掛けている水色のネックレスを見る。

「専用機持ちならそれなりのことは知っているでしょ?」

「そうだけど・・・。私はただデータ収集が目的で専用機を持っているだけだし・・・」

「そうかな・・・。でもただでさえ少ないISなんだよ。専用機を持つてことはそれなりの腕と知識があるってことだよな」

「・・・」

ゼオラはしばらくして・・・

「わ、分かったわ・・・。私が教えることは教えるわよ・・・。でも私だけじゃ不安だからもう一人連れて行くわ」

「もう一人？」

「ええ。隣の二組にラトっていう友達がいるの」

「へえ……ゼオラの昔からの友達なの？」

「うん。昔孤児院に一緒にいた子なの。しばらくしてとあるIS研究所に行ったんだけど、昨日会ってきたのよ。」

「そうなんだ……」

「ラトならISの知識を私より知っていると思うから」

「そっか……。それはかなり心強いよ」

「じゃあ明日ラトに言っておくわね……。一応言っけど、言ったあなだが遅れないでね」

「分かっているよ。僕もそれなりの期待に応えないとね」

そうして二人はしばらく話をした……

S t o r y 1 自分ともう一人以外は全員女子（後書き）

新しく作品を投稿しました・・・。今後意見など感想を書いてください。

Story 2 専用機

そして次の日の放課後……

第四アリーナにスバルとゼオラ、更にもう一人いた。

パープルのショートヘアをした女子で、背丈はスバルより少し低く、眼鏡をかけていた。

「ゼオラが言っていた子って、この子のこと？」

「ええ……。ラト……。今日の昼休みに言ったスバルよ」

「この人が……。？……はじめまして……。『ラトウーニ・スウボータ』です……」

「ラトウーニ……。ゼオラから聞いていると思うけど僕は近衛スバル……。よろしくね……。ええと……」

なんて呼ぼうかスバルは悩んだ。

「な、名前で呼んでもいいですよ」

「そ、そっか……。よろしくねラトウーニ」

「は、はい」

そして二人は握手した。

「それにしても・・・訓練機をよく借りれたわね」

ゼオラの視線の先には『ラファール・リヴァイブ』を装着したスバルの姿があつた。

「いやあ・・・。借りる際に書いた申請書がまた沢山あつてね、それで少し遅れたんだよね」

普通ならスバルが書いた以上に申請書を書く必要があるのだが、スバルは男子と言う特別な条件で少ないとのこと・・・

「ふーん・・・まあいいわ」

そしてゼオラは首に掛けている水色のペンダントを握り締めた。

「来なさい・・・ビルトファルケン！」

そしてペンダントが輝きだし、ゼオラはISアーマーを身に纏う。

身体のラインにぴったりのアーマーをして、背中には四枚の翼を持ち全体のカラーは水色が多く、各所に白が施されていた。頭のデバイスには耳に羽のようなものを装着していた。右手には実弾とエネルギー弾を発射できる大型のスナイパーライフル『オクスタンライフル』を装備していた。

「へえ・・・。それがゼオラのISなんだ」

「ええ……。ビルトファルケンよ……。高機動戦闘を考慮に入れて射撃戦を得意とする第三世代型のISよ」

「そっか……。だからアーマーが余計にあるものじゃないんだ」

スバルは感心したようにファルケンを見る。

「じゃあ初めに模擬戦でもやる？」

「うん。ゼオラの腕も見てみたいしね」

「そうなの……。じゃあラト」

「なに？」

「私たちに戦闘を見てくれる？私は戦闘に集中しているからあんまり見ている暇がないの。だからラトが見て意見を言ってくれろ？」

「うん……。わかった」

そうしてゼオラはスバルに向き直る。

「じゃあ行くわよスバル……。言っておくけど手加減はあんまりしないからね」

「僕もそのつもりだよ」

そして両者は臨戦態勢を取る。

「！」「！」「！」

両者は同時に動き出し、ゼオラはオクスタンライフルを構えた。

「まず一発!」

そしてトリガーを引き、下の銃口からエネルギー弾を発射した。

「くっ!」

スバルはとつさに攻撃を避けると、両手にサブマシンガンを展開してゼオラに向け攻撃する。

ゼオラはファルケンの機動力を生かして攻撃を避けていき、オクスタンライフルから実弾を次々と放っていく。

「さ、さすが……。でも……!」

スバルは右手のサブマシンガンを収納すると、アサルトライフルを展開して左手のサブマシンガンと併用して攻撃していく。

その内数発がファルケンに直撃した。

「やるわね……」

ゼオラは気を引き締めて更にファルケンの機動力を高めてスバルに攻撃を仕掛けていく。

そしてゼオラがスバルの後ろに回りこむと……

「……!」

スバルは顔をゼオラのほうに向けて、一瞬遅れて右腕が後ろを向いてアサルトライフルを放つ。

「くっ！」

ゼオラはとつさに避けるものも弾丸は左脚部に直撃した。

「気付かれた？」

素早い動きでスバルの視界外から後ろに回りこんだが、スバルはそれに気付いていたが、何か違和感があった・・・

「まだいくよ！」

スバルはそのまま振り向いてゼオラに向けアサルトライフルを放っていく。

「くっ！」

ゼオラはいくつか弾丸を受けるものも、オクスタンライフルの『Eモード』でスバルに攻撃を仕掛けた。

「ぐっ・・・」

とつさに避けきれず、スバルはゼオラが放ったエネルギー弾を全て受けてしまう。

「これで終わりよ・・・オクスタンライフル・・・Wモード！」

そしてゼオラはオクスタンライフルを構えると、上下の銃口から実弾とエネルギー弾を同時一斉発射した。

「うわあああ！」

それによってリヴァイブのシールドエネルギーが尽きた……

「……はあ……。強いんだね……。ゼオラは」

スバルはリヴァイブの装着を解除して地面に座り込む。

「スバルも結構やるわね……。もし少し動きが違っていたらたぶんどうなっていたか分からなかったわ」

「そっか……。僕もまだまだだね」

「そうかもね……。ところでラトの意見はどうなの？」

「…….…….」

するとラトウーニは何か表情が険しい。

「……ラト？」

「あつ……。ごめん……。ちょっと気になっていたことがあるの」

「気になる？どこか引つかかるところがあったの？」

「うん……。ゼオラがスバルの後ろに回りこんだときの」

「あの時？」

「スバルはとつさに振り向いたけど……。リヴァイブは一瞬遅れて腕を動かしていたの」

「一瞬遅れてって……」

「……たぶん……スバルの反応速度にリヴァイブが追いつけていないと思う」

「……追いつけていないって……じゃあそれがなかったらどうなっていたの……？」

「……ゼオラの攻撃は多分当たっていないと思う」

「当たらないって……私の攻撃が当たらないの？もしスバルに合ったISだったら」

「うん……。動きを見て明らかにリヴァイブの反応が一瞬遅れているの」

「そういえば……。なんだか遅れていたような気がするなあ……。リヴァイブのほうが遅れていたんだ」

「そうなる」

「……あんたって……案外凄いな」

「うーん．．僕はあんまり自覚がないかな．．．」

「そういえば、例えば反応が遅れていたって言っても動きは良かったわね．．．。スバルはISの訓練でもしていたの？」

「いや．．。それはしてないけど．．。前に『PS』を扱っていたときがあったの」

「『PS』？．．確かそれって．．．」

「ISの技術を応用して作られた．．．『擬似IS』とも呼ばれる機動兵器」

「あつ、そうそう．．。それを扱っていたらなのね．．。でもISとPSって同じなの？」

「基本的にISとほぼ同じだから操縦方法もほとんど同じだけど、ISのコアを使用していないから男性にも扱えるものなんだけど、ISのコアを使用していない分従来のISより性能が劣っている」

「へえ．．」

「でも、PSは凄いつてある人は言っていたよ」

「ある人？」

「うん．．．。お母さんの知り合いでとある特殊部隊の人がこう言っていたの．．．『PSはISより性能は劣っているけど、操縦者の技量次第では最新鋭のISにも匹敵する力を秘めている』って言

っていたの」

「へえ・・・」

「確かにPSはISに唯一対抗できる兵器だって言うね」

「そうなんだ・・・まあ、それでもスバルの腕は確かにあるわね・・・でもISが合っていないと少し不便ね」

「うーん・・・そうだね・・・。僕もゼオラのように専用機が欲しいな」

「たぶん専用機は与えられると思うよ」

と、ラトウーニが言う。

「そうなの？」

「うん・・・。男子でISを扱える事態特殊な例だから・・・。データを取得するためにたぶんスバルにも与えられると思うよ」

「・・・そうだいいな。ところでラトウーニも専用機を持っているの？」

「う、うん・・・。専用機って言うわけじゃないけど・・・一応持っている」

と、ラトウーニは左腕にしていた青いブレスレッドを見せた。

「へえ・・・ラトウーニもゼオラのようにデータ収集のためなの？」

「うん・・・私の専用機は大幅に改修中だから代わりに試作機のデータ収集を行っているの・・・。今は改めてデータ収集を行っている『ゲシユペンストMK-? タイプS』なの」

「なるほどね・・・」

「ラトも結構腕はあるのよ」

「へえそうなんだ・・・。じゃあ今度模擬戦を行うときに相手になつてくれる?」

「・・・うん・・・。いいよ」

ラトウーニは何かおどとした様子で答えた・・・。

そして次の日・・・。

「隣・・・いいかな?」

「ん?・・・ああいいぜ」

昼休みにスバル食堂に来ており、料理を持って一夏の隣に座った。

「近衛・・・スバルだったかな?」

「うん・・・そうだよ・・・織斑さん」

「俺のことは一夏でいいよ」

「そう?・・・じゃあ一夏も僕のことはスバルでいいよ」

「そうか・・・じゃあそうするよ」

「でも、なんだか大変なことになったね」

「ああそうだな・・・いきなり代表に選ばれるって言うてもなあ・・・自信とかそういうものがあんまりないよな」

「そうだね・・・でも選ばれたからにはそれなりの責任があるね」

「責任か・・・そうかもな」

「でも一夏がああ織斑先生の弟って言う物凄いわね」

「そ、そうか?」

「そりゃそうだよ。何だって第一回モンドクロッソの優勝者なんだよ・・・知らない人はいないよ」

「・・・そうだな・・・」

「でも第二回は決勝戦前でまさかの棄権だからね・・・僕も見えて驚いたよ。一体どうしたんだろ?」

「……………」

すると一夏の表情が曇る。

「あつ、ごめん……。僕悪いことを言っただかな？」

「い、いいんだ……。気にしないでくれ」

「そ、そう……。？なら、いいんだけど……」

スバルはどもも申し訳なさそうだった……

「……隣……。いいか？」

と、少しして一人の女子が来た。

「ああいいぜ箒」

そうして箒と呼ばれる女子は一夏の隣に座った。

「この人は？」

「ああ……。俺の幼馴染の箒だ」

「……。篠ノ之箒だ」

「へえ……。僕は近衛スバル……。よろしくね」

「……。あ、ああ」

「そういえば・・・篠ノ之つて・・・あの篠ノ之博士の・・・」

「ああ。箒は束さんの妹だ」

「へえ・・・。そうなんだ」

「・・・・・・・・・・」

箒はスバルを睨む。

「・・・ええと・・・僕何か悪いこと言ったかな？」

「・・・なんでもない」

と、箒はそのままご飯を食べた・・・

そうして昼休みが終わって五時限目・・・

「授業の前に、織斑、近衛には一つ伝えることがある」

授業が始まってすぐに織斑先生はこういう。

「学園で用意できる予備機がない・・・。そのため二人には専用機が与えられることになった」

「え？」

「へ？」

二人はどうも理解できていないが……

「え！？この時期に専用機を！？しかも一年の時に？」

「それって政府からの支援が来るってこと？」

「いいなあ……私も専用機が欲しい」

と、教室中が騒いだ。

「ええと……どういうこと？」

Bannon！と一夏は織斑先生に出席簿で叩かれた。

「教科書六ページを読め」

「え……は、はい……。ええと——」

長いので省略……

「つまりはそういうことだ。本来なら専用機は企業の所属か各国の代表、もしくは代表候補生にしか与えられない……。が、お前たちは事情が事情だ……。データ収集を目的に専用機が与えられる。わかったか」

「は、はい」

「わかりました」

「だが、織斑の専用機は少し時間が掛かる．．．が、近衛の専用機は一足早く到着する予定だ．．．。そのため代表決めでは最初にオルコットと近衛が対戦するようになった」

「僕が．．．最初に．．．？」

スバルは実感がわかなかった．．．．

「凄いじゃない。スバルも専用機がもてるようになったわね」

「う、うん．．．。ラトウ二の言う通りになったね」

そうして夜になってスバルとゼオラは自室にいた。

「そういえば、授業が終わった後に織斑先生に呼ばれたけど、なんて言われたの？」

「うん．．．。僕の専用機はどうもとある研究所から送られた試作型のISだって」

「ふーん．．．。別にいいじゃない。私のやラトのISも試作型なん

だし」

「いや、なんていうか・・・ただの試作型じゃないらしい」

「どういうこと？」

「なんだか学園側も詳細を知らされていないISだって」

「詳細を？何だかおかしいわね・・・普通ISのデータぐらい教えるはずなんだけど」

「そうなんだよね・・・でも結構凄いISらしいよ」

「ふーん・・・まあでも専用機がもらえることだけでも凄いことだし、専用機を十分に使いこなせるようになったら、また対決しよう」

「うん。僕もリベンジするよ」

「それにしても、いきなりオルコットさんと戦うことになるなんてね」

「うん。僕も思っていなかったよ」

「でも、私はラトと観客席から応援しているよ」

「ありがとう・・・。そうまでしてもらつと責任が重いね」

「そうね・・・でも、それだけ名誉はあるよ」

「そうだね……。やるだけのことは頑張るよ」

「その意気よ」

そうしてゼオラはスバルに向けてグツとした。

「しかし……。本当によろしかったのですか？『レッド』を送り出して」

「ああ。今は力が必要とする事態だ……」

ここはとある研究所……。そこで二人の男性が話していた。

「とはいっても、あの機体はかつて重大かつ最悪な事故を起こしたISと同じ系列のISなんですよ。もし『やつら』にばれたりすれば……」

「その心配はない……。もうやつらはあの機体のことは存在しないと思っているだろう」

「ですが……」

「それに、『レッド』には改装を加えている。すぐには分からないようにしている」

「・・・・・・・・」

「それと、『R-1』はどうなっている」

「R-1はロールアウトした後に操縦者を探しているのですが・・・なぜか我々が挙げた候補すべてをR-1自身が拒んでいて、中々研究が進展していません・・・しかしISが操縦者を拒むとは・・・ありえない」

「・・・R-1は自身が選んだ操縦者しか認めない・・・そういう風に作り上げている」

「なぜそんなことを・・・それではあまりにも効率が悪いですよ」

「それでいいのだ・・・R-1は『SRX計画』の要となる機体だ」

「・・・・・・・・ですが」

「その心配は要らない・・・R-1の操縦者に相応しい人物を知っている」

「操縦者に相応しい人物とは？」

「かつて第二回モンドクロッゾで決勝戦まで勝ち上り、棄権での優勝をした選手の息子だ」

「まさか・・・R-1には男性を乗せると言うのですか？ですがそれ

では」

「確かにISは女性にしか反応しない……。だが、完全に反応しないわけではない」

「……。それは……。最近現れたISを扱える男子がいるからですか？」

「そうだな……。とりあえず、計画を進めてくれ……」

「……。イングラム少佐……。あなたは一体……。何をしようとしているのですか」

「……。いずれ……。分かる時が来る……」

そうしてイングラムと呼ばれる男性は研究室を出た……

S t o r y 2 専用機（後書き）

次回主人公機が登場。ちなみにいうと、なぜラトウニがゲシユペ
ンストMK-？ タイプSだというのは、後に分かりますよ。

Story 3 クラス代表決定戦

そうして時間が過ぎてクラス代表を決める対決の日が来た……

「どう？今の気分は」

「……うーん……なんだか自信がないなあ……」

IS学園内にあるISアリーナのピットにスバルとゼオラがいた。

「自信を持って……。今日まで色々としてきたでしょ」

「そうだけど……。やっぱり本番になると不安になるんだよね」

「うーん……。やっぱりそうよね……。でも、スバルのISって一体どんなものなんだろう……。なんだか楽しみ」

「うん……。少し不安はあるけどね……」

と、話していると……

「近衛君！……来ましたよ」

と、奥から山田先生が来た。

「近衛君の専用機が」

そしてピットの搬入エレベーターが上ってきて、一体のISが姿を現した・・・

「これが・・・」

スバルはゆつくりとそのISに近付いた。

全体のカラーリングは紺がメインで、薄い部分と濃い部分があった。背面には折りたたまれた翼があり、片方ずつに三枚、計六枚の翼を持っていた。全体の形状としては直線ラインが多いものであった。

「・・・・・・・・・・」

そしてISに触れると、ISから光が出てきて、反応を示した。

「・・・・いける」

するとISが展開して受け入れ態勢を取った。

「ISの名称は不明で、その性能も聞かされていませんので、気をつけて使ってください」

「は、はい」

「では、急いで装着して下さい・・・既にオルコットさんがアーリーナで待っています」

「わかりました」

そしてスバルは急いでISを装着した。

「・・・・・・・・」

装着し終えたスバルは立ち上がると、感覚を確かめる。

装着して分かることだが、額には出っ張ったパーツを付け、耳にはデバイスが装着されていた。そして両肩にも横に少し伸びた装甲を装着して、腰にもリアアーマー、サイドアーマー、フロントアーマーを装着していた。

「・・・リヴァイブより・・・身体に馴染む・・・」

そして数歩前に出て、ピットのカタパルトに足を置く。

「スバル・・・頑張って！」

と、ゼオラはスバルに手を振った。

「うん……。頑張るよ」

そして前かがみになると、カタパルトが動き出して、そのまま外に飛び出し、それと同時に背中のウイング三枚を展開した。

「T-LINKシステム・・・稼動開始・・・レベル1」

そうしてアリーナに出ると、すでにセシリアが待っていた。

「いきなりあなたと戦うことになりましたね・・・近衛さん」

「そうだね・・・。僕も意外だよ」

「ですが・・・この戦いでわたくしが勝つことは目に見えていますわ・・・ここで降参でもしますか？」

「それは断るよ・・・。何もしないで負けるのだけはゴメンだね」

「そう・・・。でしたら——」

と、セシリアは大型のライフルをスバルに向けて構えた。

「お別れですわ！」

そしてトリガーを引きエネルギー弾を発射した。

「っ！」

スバルはとっさにエネルギー弾をかわした。

「初弾をかわすなんて・・・ほめて差し上げますわ・・・しかし・・・」

そしてセシリアはそのままエネルギー弾を連続して発射した。

スバルはかわすので精一杯だった。

「さあ、踊りなさい！このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

「くっ！・・・ゼオラより精密な射撃・・・やはり代表候補は一味違う・・・」

スバルはセシリアの射撃をかわしていくものも、一発が左肩に直撃する。

「ぐっ・・・！・・・何か武器は・・・」

と、検索すると、『フォトンライフルS』が表示された。

「・・・ライフルか・・・まあやるしかない！」

そしてスバルは右手にフォトンライフルSを展開するとセシリアに向けてトリガーを引く。

「凄い・・・訓練のときより断然動きが違う・・・」

「確かに」

ゼオラはラトウーニとピットのモニターでスバルの戦いを見ていた。

「ラト・・・どう思う？」

「・・・あのIS・・・スバルの異常なまでの反応速度に・・・追いついている・・・。いや、それ以上に動いている・・・」

「そこまで・・・あのIS・・・確かに普通じゃないわね」

ゼオラはそのままモニターを見た・・・

「T・LINKシステム・・・稼働率・・・レベル2・・・」

そして戦闘開始して十数分が経過した・・・

「ほめて差上げますわ・・・初見でこのブルー・ティアーズとここまで戦ったのはあなたが初めてですわ」

「・・・それはどうも」

「でも・・・そろそろ本気でいかせて貰いますわ！」

そしてセシリアは両肩の浮遊ユニットからビットを二基射出してスバルに攻撃を仕掛けた。

「ビット・・・！」

スバルは迫ってくるビットの攻撃をかわしていき、フォトンライフルSのトリガーを引く。

「くっ・・・!」

しかしビットは細かく動いていき、弾丸を避けていき、エネルギー弾を放ってくる。

「このままじゃ・・・」

「T・LINKシステム・・・稼働率・・・レベル3・・・」

「っ!」

するとなにかが頭を駆け抜け、勘が冴えてきた。

そしてスバルの後方にビットが回り込んだ。

「貰いましたわ!」

そしてビットにエネルギーが充填し始めた。

「・・・」

すると、スバルは身体を捻らせて、後方にいるビットに向けフォトンライフルSのトリガーを引き、弾丸はビットを撃ち抜いた。

「えっ!？」

セシリアが驚いている間にスバルはもう一基を撃ち落とした。

「あの状態から命中させた!？」

そしてスバルはフォトンライフルSを放ちながらセシリアに迫る。

「くっ!」

セシリアはスターライトMK-?のトリガーを引き、スバルに攻撃を仕掛ける。

スバルはフォトンライフルSを放っていくが、次の瞬間鈍い音がした。

「・・・!・・・しまった!？」

モニターには弾切れが表示されていた。

「弾切れとは・・・迂闊ですわ!」

そしてセシリアはそのままスターライトMK-?のトリガーを引き、エネルギー弾を放った。

「T-LINKシステム・・・稼働率・・・レベル4・・・」

「っ！」

誰もが命中すると思われたが・・・スバルは身体を少しずらして、迫ってくるエネルギー弾をかわした。

「そ、そんな!？」

セシリアはかわされたことに驚いていた。

「くっ・・・他に武器は・・・？」

スバルはフォトンライフルSを収納しながら武器を検索すると、二つの武器が表示された。

「マシンガンとナイフか・・・まあ武器がないよりましだけどね」

と、スバルは右手に『M950マシンガン』を展開してセシリアに向かっていく。

「くっ・・・今のはまぐれですわ！」

セシリアはビットを更に二基射出して攻撃してきた。

スバルは回避しながらM950マシンガンのトリガーを引いて弾丸を発射してビットを一基撃ち落とした。

「分かったよ・・・この武器の弱点が！」

「っ!？」

「この武器は君が命令を下さないと攻撃しない……。その間君は動けない！」

そしてスバルはマシンガンを放っていき、セシリアに命中させていく。

「くっ……。弱点を見抜いたことはいいいでしょう……。ですが……」

と、セシリアはスターライトMK-?を放つと、その直後にビットをスバルの後方にやった。

スバルはエネルギー弾をかわすと、左手に『コールドメタルナイフ』を展開してそれを後方にあるビットに投げつけた。

「気付かれていた！？」

そしてビットに突き刺さったナイフをスバルはとつさに掴んでそのままビットを切り裂いた。

「これで全部だね」

そしてスバルはマシンガンを放ちながらセシリアに急接近して、コールドメタルナイフをセシリアに振り下ろした。

「くっ！」

セシリアはとつさに左手にブレードを展開した。

「このわたくしに剣を使わせるなんて・・・」

「これなら――」

「ですが・・・まだですわよ」

「え？」

「ビットは全部で六基ありましてよ!」

と、セシリアは両サイドから砲身を出してスバルに向けた。

「しまっ!」

スバルはとつさに離れようとするが・・・

「もう遅いですわ!」

そしてセシリアはミサイルを発射して、スバルに向かっていく。

「くっ!」

そしてミサイルが命中して爆発した・・・

「あっ!」

ピットのモニターを見ていたゼオラが声を上げる。

「・・・心配ないよ」

「え？」

ゼオラは再度モニターを見ると・・・

「こ、これって!？」

そして煙が晴れると、そこには形状が変化したISを身に纏ったスバルの姿があった。

「こ、これは・・・？」

スバルは腕を退けると、形状が変わっているISに驚いていた。

基本的に直線のラインの形状は変わっていないが、脚部と腕部の装甲表面のデザインが変化しており、腰のフロントアーマーがリアアーマーと同じ形状になり、額のパーツからは黄色のV型アンテナが追加されていた。大きく変化していたのは背中の中のパーツであり、六枚の翼は無くなり、代わりにスラスターがもう二基追加されて、コンテナが新たに追加された。

フィッティング

「最適化を完了しました・・・。及び、T-LINKシステム稼働率レベル5に移行・・・。システムの完全稼働を確認しました・・・」

すると、ISの足からカラーが徐々に変化していき、紺から赤いカラーリングに変化した。

「ま、まさか……ファーストシフト第一形態移行!?……あ、あなた……今まで初期設定で戦っていたと言うのですか!?!」

「……僕にもよく分からないけど……これでこの機体は僕の専用機になったわけだね」

そしてスバルは右手に『マグナビームライフル』を展開した。

すると、モニターにデータが表示された。

「ヒュツケバイン・・EX・・?エクストラこれが……このISの名前……」

その間に更新されたデータが流れていき、ある程度流れたらウィンドが閉じた。

「くっ!……いくら第一形態移行をしたところで!」ファーストシフト

と、セシリアはスターライトMK-?を構えるとトリガーを引いてエネルギー弾を発射する。

しかしスバルはそこから動かず、身体を少し横にずらしてエネルギー弾をかわした。

「見える!」

そしてスバルはマグナビームライフルをセシリアに向けながら脚部

後部の装甲を展開して高速で移動した。

「は、速い!？」

セシリアはエネルギー弾を次々と放つが、スバルには当たらない。

その間にスバルもマグナビームライフルを放ちセシリアに次々と命中させていく。

「くっ!・・・先程より命中率が上がっている!？」

セシリアは何とか避けるが、避けきれなかった。

「マルチトレースミサイル!」

そしてスバルは背中の中のコンテナを開き、そこから無数のミサイルを発射した。

「くっ!」

セシリアはミサイルから逃げながらスターライトMK-?で撃ち落していく。

「こ、こんなものでこのわたくしを・・・」

「それはただの囃」

「えっ!？」

セシリアは声がしたほうを向くと、そこには右腕に『グラビトンラ

イフル』を展開してセシリアに向けていたスバルがいた。

「これで終わりだよ！」

そしてグラビトンライフルの銃口から黒っぽいビームが発射された。

「っ！」

そしてビームはセシリアに直撃すると、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが尽きた……

『試合終了！ 勝者……近衛スバル！』

「な、なんとか……かつ……」

スバルは一旦地面に着地すると、突然めまいが襲った。

倒れそうになるも何とか踏ん張った。

「や、やっぱり……なんか慣れないなあ……。と、とりあえず……ピットに戻るかな」

と、スバルはそのままピットに戻っていった……

「ま、負けた……このわたくしが……」

セシリアは地面に四つんばいになって落ち込んでいた……

「……悔しいはずなのに……」

セシリアは悔しいはずだが、何か別の感覚があった。

「……なぜ……悔しくないの……むしろ……」

と、セシリアはスバルの顔を思い出す……

「……負けても……よかった……？」

そうして考えながらセシリアはピットに戻っていった……

「おめでとう、スバル！」

スバルがピットに戻ると、ゼオラとラトウーニが迎えてくれた。

「ゼオラ……ラトウーニ」

「それにしても戦闘の最中で第一形態移行を行^{ファーストシフト}うなんて」

「うーん……。僕も思っていなかったな……」

「でも、結構凄かった……。ISを扱ってどうだったの？」

「やっぱりリヴァイブよりいいな……。僕の反応速度に追いついているし、身体にも馴染んでいる……」

「そう……」

と、話していると……

「盛り上がっているようだな……」

と、後ろから織斑先生が来た。

「織斑先生」

「近衛……。戦闘から帰ってきたところすまんが、次の対戦がある」

「え？対戦って……」

「ああ。織斑の専用機が到着した。今は装着中だ」

「そうなんですか」

「お前にはISの補給を行い、完了次第アリーナに行ってもらおう。そこで織斑と対戦だ」

「は、はい」

そしてスバルはピットの隅にある補給所に行き、ISの補給を開始した……

そしてしばらくしてスバルは補給が完了してアリーナの中央まで来た。

その後に専用機を身に纏った一夏が来た。

「お前とこうして戦うことになるとはな」

「僕も思っていなかったよ……。そのISってなんて言うの？」

「……『じやへし白式』だ……。お前のも結構すごいのか」

「そうだね……。話はこれくらいにして、遠慮はしないよ、一夏」

と、スバルは両手に『M950マシンガン』を展開した。

「ああ。俺もそのつもりさ」

そして、試合開始のブザーが鳴った。

開始と同時にスバルはM950マシンガンを掃射した。

「くっ！」

一夏はとっさに避けるが、最初の弾丸は直撃した。

「逃がさない！」

スバルはそのままマシンガンを横に逃げていく一夏に放っていく。

「くっ……何か武器は……」

と、一夏は武器の検索をすると『近接ブレード』が表示された。

「これだけかよ！？……まあ素手でやるよりはましか！」

一夏は右手に近接ブレードを展開するとスバルに向かっていく。

スバルはマシンガンを放ちながら後退して距離を保つ。

「……そろそろ弾が切れるかな」

と、スバルはマシンガンを収納すると、左手にブレードを鞘ごと展開した。

「シシオウブレード！」

スバルは鞘から日本刀型のブレードを抜き放つと、鞘を収納して一夏に向かっていく。

「でえい！」

そして両者のブレードが交じり合い、火花を散らす。

「やるな……スバル」

「一夏もね……太刀筋はいいみたい……でも……」

そしてスバルは一夏を押し返すと右足後部の装甲を展開してスラストターを噴射させて一夏に回し蹴りを入れた。

「ぐっ！」

「はああああ！」

そして回転しながらシシオウブレードを振るい、一夏を切りつけた。

「ぐああっ！？」

そのまま地面に向かって落ちていくが、何とかぶつかる直前に踏ん張った。

その間にスバルはシシオウブレードを収納して、マグナビームライフルとM950マシンガンを展開して一夏に放つ。

「く、くそっ・・・俺が白式の反応速度に追いついていない・・・」

一夏はそのまま回避をするが、その動きはあまりにも無駄が多かった。

「このまま決めるかな・・・。マルチトレースミサイル！」

と、スバルは背中の中のコンテナを展開して、ミサイルを発射した。

「ま、マジかよ！？」

一夏は慌てて逃げていき、近くまで来たミサイルを切り落としていくが、最終的に多数のミサイルを受けてしまった・・・

「・・・凄い・・・」

ピットのモニターからゼオラとラトゥーニ、織斑先生が見ていた。

「・・・ふっ・・・。機体に救われたな、馬鹿者が」

「え？」

「・・・・・・」

そして煙が晴れると、そこには形状が変わった白式がいた。

「第一形態移行・・・」

スバルはマグナビームライフルとM950マシンガンを収納して、シシオウブレードを展開した。

「・・・これは・・・？」

一夏は一瞬分からなかったが、すぐに理解した。

「・・・何だか分からないが・・・これでこいつは俺の専用機になったってことか？」

「そういうことだね」

と、スバルはシシオウブレードを構えた。

そして一夏は右手に持っていた武器を見る。

「・・・これって・・・」

すると、その武器のデータが流れた。

「・・・『雪片式型』？・・・雪片って千冬姉が使っていた武器と同じ名前じゃないか・・・。全く・・・俺は最高の姉さんを持ったよ」

と、一夏は雪片式型の刀身を展開してビームの刃を出した。

「いくぞ、スバル！」

「いつでも！」

そして両者は一気に飛び出し、ブレードを振り上げた。

「・・・！」

すると、スバルはとっさにシシオウブレードを振るうのをやめると、両脚部後部を展開してスラスターを噴射させて回避した。

「な、なに？」

一夏も予想外の動きに戸惑っていた。

「くっ、回避するなら・・・また当たれば――」

と、再びスバルに接近しようとした瞬間・・・

『試合終了！・・・勝者・・・近衛スバル！』

「え・・・？」

「・・・・・・・・」

すると、試合はなぜかスバルの勝利に終わった・・・

「な、なんで・・・？」

一夏だけ理解できていなかった・・・

「全く・・・あれだけ盛り上げておいてこの結果か・・・大馬鹿者・・・」

「す、すいません・・・」

ピットに戻ると織斑先生からまず一言がこれ・・・

「武器の特性を把握していないからだ・・・。今後は時間が空いているときはISの訓練に励め・・・いいな」

「はい・・・」

と、うなだれる一夏・・・

「え、ええと、二人のISは今待機状態になっていますが、呼び出せばすぐに使えます。あ、でも規則はありますからね・・・。はいこれ」

と、山田先生は一夏とスバルに分厚いISの規則書を渡した。

ちなみに一夏の白式の待機状態は右腕にガントレットとして装着されていた。

一方のスバルのヒュッケバインEXの待機状態は赤くEの形をして左腕に下げられているキーホルダーであった。

「まあなんにせよ、今日はもうこれで終わりだ・・・帰って休め」

「はい」

「わかりました」

と、二人はそれぞれ寮に帰っていった・・・

「やったねスバル！これでクラスの代表だね」

「う、うん……。そうだね」

そうして時間は夜の八時半を回っていた……

「でも、なんだか実感がわかないな……」

「最初はそうでしょうね……。でも慣れるよ」

「……………」

「それにしても……」

と、ゼオラは背伸びしたり、腰を回し始めた。

「どうしたの？」

「いやぁ……。なんだか疲れが溜まったのかな……。なんだか背中や腰がきついよね」

「……そうなの……。じゃぁ横になって」

「え？どうして……」

「僕がマッサージをするよ。こう見えても得意なんだ」

「そうなの？……。じゃぁお願いしようかな」

と、ゼオラはベッドに仰向けになって寝た。

「じゃあいくよ」

と、スバルはゼオラの腰に手を置いて少しずつ押していく。

「うう・・・そこそこ！・・・効くう・・・」

と、とても気持ちよさそうだった・・・

「次は背中だね」

そしてスバルは背中の方に手をやって揉むようにして手を動かす。

「くう・・・！結構効くう・・・本当にマッサージがうまいのね」

「うん・・・慣れたからかな・・・」

「慣れた？」

「うん・・・。昔こつこつことをやっていたことがあったんだ」

「へえ・・・どういうことをしていたの？」

「・・・実はね・・・少し前まで執事をしていたんだ」

「・・・へ？・・・執事？」

「うん・・・。実はね——」

「・・・そんなことが・・・あったんだ」

「うん・・・。僕はそれからお母さんのおじさんの家に預けられたんだ。おじさんはとある家の執事をやっていたから、僕はその見習いとして働くことになったんだ」

「そうなんだ・・・」

「僕はそこでその家の長女に目をつけられてね、それから中学三年間ずっとその人の執事をするようになったの」

「へえ・・・。だから面倒見がいいんだ」

と、ゼオラは今日までの日をさかのぼって思い出した。

部屋の片付けと掃除はもちろん、お茶が欲しい時になると必ずスバルがお茶を入れてくれることやなど、そんなことがあった。

「うん・・・。今でも執事の礼儀は忘れていないよ」

「ふーん・・・。で、スバルを執事にしたのって誰なの？」

「・・・」

するとスバルは黙った。

「・・・それは・・・秘密」

「ええ・・・？なんで・・・教えてよ」

「だめ」

「別に誰にもいわ・・・って、痛い痛い!!」

と、スバルは手に力を入れて更に指を立ててゼオラの腰を強く押した。

「わ、分かった!もう聞かないから!」

そしてスバルは力を抜いて、優しくマッサージを続けた。

「うう・・・そこまでしなくても・・・」

「ごめんね・・・」その人がこの生徒会長をやっているって・
・言いにくいよね」

そうしてしばらくマッサージを続けた・・・

そして次の日・・・

「——では、一組の代表は近衛スバル君に決定しました」

朝のSHRでクラス代表が決まったことが発表された。

「こ、これから・・・よろしくお願いします」

スバルは席を立つと後ろを向いて挨拶した。

「あれ？」

そこでスバルはあることに気付いた。

よく見ればセシリアがいない。

（どうしたんだろう・・・？）

スバルは疑問に思うと、山田先生のほうを向く。

「あの・・・オルコットさんはどうしたのですか？」

「オルコットさんですか？連絡によれば体調不良だと聞いています
が・・・」

「そう・・・ですか」

スバルは後で見舞いに行こうと考えて席に座った・・・

「ええと・・・オルコットさんの部屋は・・・」

そして放課後、スバルはセシリアの見舞いに行くため寮の廊下を歩いていた。

「ここかな？」

そうして他の人からの情報を頼りにして、セシリアの部屋の前に来た。

「うーん・・・ここまで来ておいて気が引けるってなんだかなあ・・・」

そしてスバルはドアをノックした。

「・・・誰ですの・・・？」

「僕だよ・・・スバル」

「・・・スバル・・・さん？」

「うん・・・今日の朝からいないからちょっと心配で来たんだ」

「・・・そう・・・ですの・・・。入ってもいいですよ」

「分かった・・・（・・・ん？さっき僕のことを名前で呼んだ？）」

そう思いながら、スバルは部屋に入ると・・・

（うわぁ・・・こりゃ凄い・・・）

スバルは部屋の中で驚いた。

部屋の大半がベッドで占められていた。

そのベッドもまさにお姫様が寝るようなもので、かなり豪華だった・

そのベッドにセシリアは寝ていた。

どうも本当に体調が悪いのか、顔色が悪い。

「大丈夫なの？」

「え、ええ……。大丈夫ですわ」

「そっか……。よかった……」

「……。どうして……。来てくださったのですか？」

「どうしてって……。それは来るよ。昨日まで元気だったのに、急に体調が悪くなったら心配するよ」

「そう……ですか」

「……。でも、本当に大丈夫そうでした」

「……」

すると、セシリアの顔が赤くなった。

「……。あ、あの……」

「ん？」

「・・・そこに置いてあるお飲み物を・・・とっただけませんか？」

「・・・いいよ」

と、スバルはテーブルの上に置いてある飲み物を取ってセシリアに渡した。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

セシリアは一口飲むと、スバルを見る。

「・・・」

「どうしたの？」

「い、いえ・・・なんでもありません」

「そう・・・じゃあお大事にね」

と、スバルは部屋から出ろうとすると・・・

「あ、あの・・・」

「何でしょうか？・・・オルコットさん」

「・・・わたくしのことはセシリアと呼んで下さい」

「え？・・・う、うん・・・。それで、セシリア・・・何の用？」

「・・・色々と・・・ありがとうございます」

「・・・別に・・・いいんだよ」

そうしてスバルは部屋を出た・・・

その頃・・・

「イングラム少佐・・・ヒュッケバインEXの起動を確認しました」

「そうか・・・起動できたか」

「しかし・・・本当によかったのでしょうか？」

「もちろんだ・・・。それより、R-1はどうなった」

「少佐の言った人物と・・・適合しました」

「そうか・・・。その後は？」

「R-1の操縦者として登録して、近日IS学園に転入させる予定

です」

「・・・IS学園か・・・」

「・・・それにしても、なぜ『レッド』を・・・？」

「・・・いつか分かる・・・。やつらと戦うために・・・必要な存在だ」

「・・・そうですか・・・。では、準備のほうを進めておきましょう」

そうして男性は研究室から出た・・・

「・・・・・・」

イングラムは一息つく・・・

「近衛スバル・・・希望と絶望の力・・・使いこなして見せろ・・・」

そうしてイングラムは研究室から出た・・・

S t o r y 3 クラス代表決定戦（後書き）

ヒュッケバインEXの初期段階の姿はエクスバインをイメージして
いますが、第一形態移行した後では紅いヒュッケバインMK-?を
イメージしています。後様々なオリジナル機能が付いています・・・
。

Story 4 転校生

ここはIS学園のグラウンド……

「では、これよりISの基本飛行操縦を実践してもらう。まずは専用機持ちの見本を見せる。オルコット、織斑、近衛、シュバイツァー。前に出る」

と、織斑先生に呼ばれて四人は列の前に出た。

(・・・ヒュッケバインEX)

スバル左腕にあるヒュッケバインEXの待機状態であるキーホルダーに手を当てて、心の中で名前を呼ぶと、ISアーマーを身に纏った。

それと同時にセシリアとゼオラもISアーマーを身に纏って、少し遅れて一夏もISアーマーを身に纏った。

「では、始める」

そして四人は同時に空に飛び上がった。

『どうした。お前のISのほうがスペックは高いのだぞ。もっとスピードを上げてみる』

「そ、そう言われても」

空を飛んですぐに織斑先生からそれだった・・・

『一夏。もっと空を飛ぶイメージを強めてみたら？』

「うーん・・・イメージを強くっていつても・・・」

『スバルさんの言う通りですわ。所詮イメージはイメージですわ』

「イメージねえ・・・」

と、空を飛んでいると・・・

『そろそろいいだろう・・・。今からお前たちには急降下をやってみよう』

と、織斑先生から言われて、スバルとセシリア、ゼオラが先に降下を開始した。

「よし・・・俺も・・・」

と、一夏は降下を開始したのだが・・・

「・・・え？」

するとスバルの横を一夏が猛スピードで過ぎていくと、グラウンド

の地面に激突した。

「誰がグラウンドに穴を空けると言った馬鹿者」

「すみません」

と、穴から一夏がゆっくりと出てきた。

「まあいい。・・・さて、次は武装の展開だ。それぞれやって見せろ」

「は、はい」

と、一夏は頭の中で自分の武器を思い浮かべて、右手にブレードを展開した。

「よし・・・」

「熟練した操縦者なら一秒も掛からん・・・。もっと早くしろ」

「は、はい・・・（それでも駄目かよ・・・）」

「次、オルコット」

「わかりましたわ」

と、セシリアは一夏より早くスターライトMK-?を展開した。

「さすがだな……。だがその横に向けて撃つポーズはやめろ。それで誰を撃つと言った」

「で、ですが……。これはわたくしのイメージを固めるために――」

「――直せ。いいな」

「……。わ、わかりましたわ……」

織斑先生の威圧に押されてセシリアは渋々返事した。

「次、近衛」

「はい」

と、スバルは右手にマグナビームライフルと左手にM950マシンガンをセシリアより少し遅いが、一夏より早く展開した。

「別々の武器を同時に展開するのはさすがだな……。しかし、展開するスピードを速めろ」

「わ、わかりました……。(うわぁ……。厳しいな)」

「次、シュバイツァー」

「はい」

そしてゼオラは右手にオクスタンライフルをセシリアとほぼ同じぐらいの速さで展開した。

「展開スピードはいいな……。だが、銃身を下げた状態で展開するクセはやめろ」

「そ、そうですか……」

ゼオラは少しがっかりしたようだった。

「……時間だな、今日はこれで授業は終わりだ。織斑、グラウンドに空けた穴は埋めておけよ」

「は、はい」

と、一夏がスバルのほうを見るが、スバルはもう帰っていた……

そうしてその夜……

「ふーん……。ここがIS学園か……」

IS学園の正面門の前に、小柄な女子がいた。

ツインテールにした髪は夜の風になびいており、その根元には金色の髪留めが月の光で鈍く光っていた。

「さてと……受付にでも行きますか……」

と、体格に不釣り合いなぐらい大きなバックを掛け直して、IS学園の中に入る。

（・・・あれ？）

そしてその女子は受付がある事務所に入って、あるものを見る。

（・・・男？）

受付には一人の男子があり、受付の人と話をしていた。

（・・・しかも・・・IS学園の制服を着ている？）

その男子はIS学園の男子の制服を着ており、背中には少し大きなリュックを背負っており、背は自分より高いだろう。

と、様子を見ていると・・・

「——はい。これで受付は終わりました。IS学園にようこそ、伊達リュウセイ君。あなたがこの学園で三人目になります」

そしてリュウセイと呼ばれる男子は受付の人に手を振って、受付横にある出口から外に出た。

（三人目？・・・もう学園に二人いるんだ・・・でもその一人は・・・）

そしてその女子は微笑むと、受付のほうに向かう……

「ふわあああ……」

スバルは大きなあくびをして、宿題をする。

「ねえ、スバル」

するとゼオラが聞いてきた。

「どうしたのゼオラ？」

「そういえば明日スバルのISの開発責任者が来るんでしょ？」

「うん……。そうだけど……聞いていたの？」

「そりゃ……あの時近くにいたしね」

今日の帰りのSHRが終わって、織斑先生から呼ばれて、明日の放課後にスバルのISの開発責任者が来ることを伝えられていた。

「どうもそこで僕のISのことを伝えるみたい」

「そうなの。まあずっとISのことが分からないままじゃ、不便だからね」

「うん。まだEXは使いこなしているってわけじゃないからね。本

当に助かると思っているんだ」

「そっか・・・」

そしてゼオラはベッドに腰をかけると、カバンからレポートが入ったファイルを取り出して内容を見始めた。

「さてと・・・。僕も宿題を終わらせるかな」

スバルも宿題に向き直ると、黙々と進めていく・・・。

「ねえねえ聞いた？転校生の噂」

と、朝から女子トークはそれで持ちきりだった。

「転校生？こんな時期に？」

「そうなのよ。しかも隣のクラスに二人もよ」

「二人？」

しかし、IS学園への転入は結構厳しく、国からの推薦がないと中々入れない・・・となれば・・・

「一人は中国の代表候補生なのよ。しかもね、もう一人って言うの

が――」

と、その女子は息を吸って・・・

「男子なのよ！」

「ええええ！？」と女子一同驚きの声を上げる。

「隣のクラスにも男子が・・・」

「俺たちと同じ境遇のやつかな？」

「そうだと思うけど・・・代表候補生？」

代表候補生といえば・・・

「あら？このわたくしの噂を聞きつけてこられたのかしら」

と、セシリアはお決まりの腰に手を当てるポーズをした。

「でも代表候補生か・・・。やっぱり専用機を持つのかな？」

「気になるのか？」

「少しね・・・。興味があるな」

と、言つと・・・

「——へえ・・・言ってくれるじゃない」

と、教室のドアのほうから声がして、スバルと数人はドアのほうを向く。

そこにいたのは、ドアにもたれかかって、腕を組んでいた昨日の女子だった。

「・・・鈴？お前・・・鈴か？」

すると、驚いたかのように一夏がその女子に問いかける。

「そうよ。二組の代表、及び、中国の代表候補生、鳳鈴音・・・こうして一組に宣戦布告を言いに来たってわけ」

「・・・なに格好つけてんだ？似合わねえぞ」

「なっ！何言ってるのよ！」

と、鈴と呼ばれる女子は顔を赤くして怒る。

「邪魔だ」

「何よ！？」

と、後ろを振り向くと、顔が青ざめた。

「ち、千冬さん！？」

そして織斑先生の出席簿アタックが決まり、ツインテールが宙を舞

う。

「ここでは織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

「それより、いつまでつつ立ってる」

「は、はい！」

と、鈴はあわてて避けると、教室を出る。

「・・・何なんだろう・・・？」

スバルは頭を傾げて考えた・・・

そして昼休みになり、スバルはゼオラと一夏、箒、セシリアと共に食堂に向かっていた。

「それにしても・・・一夏はさっきの人を知っているの？」

「ああ・・・あいつは——」

「待っていたわよ！一夏！」

と、一夏たちの前に鈴が出現した。

「鈴……。すまないけどそこどいてくれないか？食券が取れないんだが」

「う、うるさいわね。分かってるわよ」

と、文句言いながら鈴は道を開ける。

そして食事を持ってスバルたちは空いている席に座った。

「それで、一夏」

「ん？」

すると箒が一夏を睨みながら聞いてきた。

「その女とはどういう関係だ？」

「どついう関係って……。ただの幼馴染だよ」

「幼馴染？」

「ああ、箒は知らなかったな。箒は小四の終わりに引越しただろ？それで鈴が小五の頭に来て、中二ぐらいに鈴が引越したから、一年ぶりかな」

「・・・・・・・・」

「鈴。こつちが前言った筈だ。ほら、小学校の時の幼馴染で俺が通っていた道場の娘だよ」

「ふーん……。そつか」

と、鈴は筈を見ると、筈も鈴を見る。

「よろしくね」

「ああ、こちらこそ」

と、笑顔で挨拶していたが、なにやら火花を散らして、上に何か入るような気がした・

「ところで、一夏がクラスの代表になったわけ？」

「いや……。俺じゃないんだ」

「じゃあ誰よ」

「え、ええと……。僕だけど」

と、スバルは少し引き気味になりながらも名乗り出る。

「ふーん。あんたが……。それにしても一夏・『女』に負けるなんてなさけ——」

「僕……。男なんだけど」

「・・・・・・・・・・は？」

鈴は一夏のほうを向くと同時に瞬時にスバルを見る。

「あ、あんた・・・男なの！？」

「う、うん・・・。間違われるのは慣れているけど」

「じゃ、じゃあ、二人目の男って、あんたのこと！？」

「そうだけど・・・」

「・・・女っぽく見えるわねあんた・・・。まあいいわ、クラスの代表同士・・・。対抗戦のときはよろしくね」

「う、うん・・・」

「それと、あんた名前は？」

「・・・近衛スバル」

「スバルねえ・・・。さっきも言ったけど私の名前は凰鈴音・・・。鈴って呼んでもいいわよ」

「は、はあ・・・よ、よろしくね・・・鈴」

「言っておくけど・・・。私強いよ？」

「・・・・・・・・・・」

「そう言えばさ鈴。お前のクラスに男子が来たんだろ？」

「そうわね……。もうそろそろ来ると思っけど……」

と、鈴は後ろを向いて食堂の入り口を見る。

「あつ、来たわね」

すると、女子の大群に囲まれながらその男子が来た。

「あ、あの……。もういいかな……」

そしてその男子は女子の大群から出てきて食堂に入る。

「え？」

するとスバルは驚いたかのように声を上げる。

「ん？」

そしてその男子もスバルを見て驚く。

スバルや一夏と同年代の男子で、少し茶色の髪をして、背丈は高い
ほうだろう。

「……リュウセイ？」

「お前……。もしかしてスバルか？」

そして二人はお互いの名前を確認した。

「久しぶり、リュウセイ！」

「久しぶりだな、スバル！」

と、お互いは再会を喜んだ・・・

「ところで、そのお方とお知り合いなのですかスバルさん？」

と、セシリアが聞いてきた。

「うん・・・。リュウセイとは小学校の頃からの友達なの」

「ああ。俺の名前は伊達リュウセイっていうんだ。よろしくなみんな」

「でも、中学の頃に僕が引っ越したから・・・。ちょうど三年ぶりかな」

「そういえばそんなくらいだな」

「へえ・・・」

「リュウセイ・・・隣いい？」

するとラトウーニが来た。

「おっ、ラトウーニか……。いいぜ」

と、リュウセイはラトウーニを隣に座らせる。

「え？あなたラトと知り合いなの？」

するとゼオラが驚いたように聞いてきた。

「ああ。俺のお袋がISの操縦者なんだ。それでお袋は所属していた研究所によく俺を連れて行ってくれたんだ。そこにいたラトウーニと仲がよくなったんだ」

「そうなんだ。でもラトが他の人と仲良しになるなんて珍しいね」

「そ、そうかな？」

するとラトウーニは顔が少し赤くなった。

「そういえば、雪子さん今体調はどうなの？」

「今は安定しているよ」

「そっか……。よかった」

「どういつことだ？」

一夏は疑問に思い聞いてきた

「俺のお袋・・・二年前に病気に掛かって、ISの操縦者を引退してから入退院を繰り返していたんだ・・・今は病状も安定してきたんだ」

「へえ・・・」

「あつ、そうだ。スバル」

「なに？」

「今日の放課後ISのテストに付き合ってくれないか？」

「ISの・・・？もしかしてリュウセイも」

「ああ。この学園に入る前に俺の専用機を貰ったんだ。スバルも持っているんだろ？」

「うん。そうだけど」

「じゃあ、今日の放課後いいか？」

「・・・ゴメン・・・。今日の放課後に僕のISの開発責任者が来て説明を聞かないといけないんだ」

「そ、そうか・・・。じゃあまた今度頼むよ」

「そのときは任せて」

「じゃあラトウニ。今日の放課後いいか？」

「え？」

ラトウーニは少し驚いたようだった。

「ほら、俺と知り合いの女子ってお前だけだからさ。それにISSには詳しいだろ」

「う、うん」

「だから頼むよ」

「・・・りゅ、リュウセイが言うなら・・・いいよ」

「そっか。ありがとうなラトウーニ！」

「・・・」

するとラトウーニはさっきより顔が赤くなる。

そして放課後、スバルは待ち合わせとして会議室にいた。

そしてしばらく待っていると、山田先生が入ってきた。

「では、こちらです」

そして山田先生は一人の男性を会議室に入れた。

二十代後半ぐらいの男性で、青い髪を長くしており、軍人のような風貌だった。

「・・・・・・・・」

そしてその男性はスバルを見ると、そのままスバルの向かいの席に座る。

「はじめまして……。私は君のISの開発責任者のイングラム・プリスケン少佐だ」

「しよ、少佐ですか……。僕は――」

「近衛スバル君……だね」

「は、はい」

「あまり時間が取れなくてな。説明は手短にさせてもらう」

「は、はあ」

「まずは、これを」

と、イングラムはデータ端末をスバルに渡す。

「これは？」

「それに君のIS『ヒュッケバインEX』のデータが入っている。言っておくがこれは極秘内容のものだ。ここの教員だとしても、君以外のものには誰にも見せるな」

「はい……。あ、あの……」

「……なぜ君にそのISを渡したのか？……と、聞きたいのだろう」

「え？は、はい」

「……ヒュッケバインEXは元々データ収集用のISだった……。しかし元々の性能が高いこともあって、改修を加えて今の状態にした……。だがヒュッケバインEXを使いこなせる操縦者がいなかった」

「……でも、どうして僕を操縦者に？」

「……後、『T-LINKシステム』のことについて説明しておく」

イングラムはスバルの疑問を通り越して説明を続ける。

「T……LINKシステム？」

聞きなれない言葉にスバルは首をかしげる。

「君のISに搭載されている念動力増幅装置のことだ」

「念動力？」

「超能力のようなものだ。君には強力な念動力がある」

「僕に・・・そんな力が？」

「今はもうT・LINKシステムは起動している・・・。使い方はデータ端末を詳しく見てくれ」

「は、はぁ・・・」

「・・・そのISを・・・使いこなしてみろ」

そういうと、イングラムは席を立ち、会議室を出た。

「・・・ヒュッケバイン・・・EX・・・」

スバルは左腕を上げて、待機状態であるキーホルダーを見る。

「・・・一体・・・どんな秘密が？」

そしてスバルはデータ端末を開いてヒュッケバインEXのデータを見る・・・。

そしてイングラムはIS学園を出てから、学園のほうを振り向く。

「・・・フツ・・・。希望となるか・・・絶望になるか・・・お前次第だ」

そう言い残して、イングラムは学園の前に止まってあるリムジンに
乗り込んだ……

Story 5 特殊能力

ここはIS学園内の第五アリーナ・・・

「さてと・・・」

スバルはアリーナ内でヒュッケバインEXを展開していた。

今回は武装のテストとあることを試すことである。

「・・・これかな・・・？」

スバルはISのコンピューター内を探して、とあるシステムを表示した。

「・・・T-LINKシステム・・・」

スバルの目の前のモニターにはT-LINKシステムの稼動状態を表しているものであり、今の稼動状態は良好であった。

（確か念動力増幅装置だと言っていたけど・・・。とにかく試してみるかな）

と、イングラムから貰ったデータ端末に記された説明を思い出しながら、左サイドアーマーにある武器を手取る。

今回新たに両腕のマウントに箱状のパーツを装着しており、内側には円形状のパーツが見えている。それは『チャクラムシューター』と呼ばれる有線式のチャクラムである。

両サイドアーマーには置まれた状態でマウントされた武器があり、展開すると十字型の手裏剣になる『ファングスラッシャー』であり、それを右手に取ると、十字に展開する。

（・・・ファングスラッシャーに軌道のイメージを浮かべる・・・）

スバルはそのイメージを浮かべながら、ファングスラッシャーを投げた。

ファングスラッシャーはビームの刃を出して高速で回転しながら進んで行く。

「・・・・・・・・」

スバルが思い浮かべたイメージに近い動きでファングスラッシャーは軌道を変えていき、仮想標的を次々に切り裂いていく。

「・・・・・・・・っ」

しかし帰ってくる途中でファングスラッシャーの軌道がおかしくなり、そのままスバルに勢いよく向かってくる。

「うわわわわ!!」

スバルはとっさに避けさせようとするが、ファングスラッシャーはスバルの額辺りに直撃して、スバルは尻もちついて地面に座る。

「い、いててて……」

シールドエネルギーに守られていたとはいえ、衝撃は緩和できず、スバルは額を押さえながら立ち上がる。

「はぁ……。やっぱりいきなり使いこなせるわけないか」

と、スバルは近くに突き刺さっていたファングスラッシャーを回収すると、元の状態に置むと左サイドアーマーに装着する。

「……でも、あんな感じでも、操れるんだ」

スバルは普通にイメージしただけだが、そのイメージを反映してファングスラッシャーは軌道を変えた。念動力を使用して武器を操る……。それがT-LINKシステムによる武装の操作だ。

「まあ、後は慣れていくしかないか」

と、スバルは別のテストを行おうとすると……

「おつ、スバルじゃねえか」

と、後ろから呼ばれて、スバルを振り向くと、ISスーツに着替えたリユウセイがいた。

「リュウセイ」

「スバルもISを動かしていたのか？」

「うん。試したいところがあったんだ」

「なるほど」

「リュウセイはなんでここに？」

「そりゃ、ISを動かす以外何があるんだ？」

「・・・まあ、ないかな」

「だな。ちょうどいいや。ちょっと模擬戦に付き合ってくれるか？」

「模擬戦？」

「ああ。『R-1』の動きにも慣れないといけないからな。それに色々と試したいこともあるからな」

「なるほど・・・。それなら僕も同じ事があるから・・・いいよ」

「よし・・・。そうと決まれば」

と、リュウセイは右腕にあるRと模られたキーホルダーを持つ。

「行くぞ・・・R-1！」

そしてリュウセイの身体に光が纏って、ISアーマーを身に纏う。

R-1の形状は、直角のラインもあれば、流形線なラインがあり、カラーリングは白をメインに赤や青、黄色など、トリコロールカラーである。耳にはISのデバイスが装着されており、背面にはスラスター兼のウイングが搭載されており、フロントアーマー、リアアーマー、サイドアーマーが腰に装着されていた。サイドアーマーにはリボルバー式の拳銃が装着されていた。

「それがリュウセイのIS・・・」

「ああ。さっきも言ったけど、R-1って言うんだ。でもスバルのISも中々かつこいいじゃないか」

「そうかな？リュウセイのもかつこいいよ」

「そうか・・・まあ話はここまでにして——」

と、リュウセイはサイドアーマーからリボルバー式拳銃『Gリボルバー』を両手に持つ。

「遠慮はしないぜ、スバル！」

「僕もその気だよ」

と、スバルはマグナビームライフルとフォトンライフルを展開する。それと同時に両者が一気に動き出し、最初にリュウセイがGリボルバーのトリガーを引いて弾丸を放つ。

スバルはそれを避けると、マグナビームライフルとフォトンライフルのトリガーを引いて、エネルギー弾を放つ。

リュウセイは左腕にシールドを展開して一発目を防ぐと、すぐさま横に行つて二発目を避ける。

その直後にリュウセイは右手のGリボルバーをスバルに向けて弾丸を放つ。

スバルは弾丸を避けると、マグナビームライフルとフォトンライフルを収納して、M950マシンガンを両手に展開して、トリガーを引いてリュウセイに向けて放つ。

「くっ！」

リュウセイはシールドを前に出して無数に飛んでくる弾丸を防ぐ。

そしてリュウセイはシールドを地面に突き刺すと、そのまま横に移動しながらGリボルバーをサイドアーマーに装着すると、右手にブーステッドライフルを展開する。

「狙い撃つぜ！」

と、リュウセイはライフルのトリガーを引いて、弾丸を発射した。

高速で発射された弾丸はヒュッケバインEXの右肩に直撃する。

「くっ！」

衝撃が右肩から伝わり、一瞬バランスを崩す。

それを狙って、リュウセイは次々と弾丸をスバルに向けて放つ。

「・・・・・・・・」

しかしスバルは弾丸を避けようとはせず、右手のM950マシンガンを前に向けると、トリガーを三回一瞬で引くと同時に指を離して三発の弾丸を発射した。

そして放たれた弾丸はブーステッドライフルの弾丸に直撃すると、そのまま軌道を変えてスバルの横を通り過ぎる。

「す、すげえ。無理矢理軌道を変えたのかよ!？」

リュウセイはスバルの射撃の精密度に驚いていた。

「やっぱり面白いな……。なら!」

と、リュウセイはブーステッドライフルを収納すると、両拳をぶつける構えた。

「・・・・・・・・」

すると、リュウセイは集中し始めると、右拳に緑の光が纏いだす。

「・・・・・・・・?この感じ・・・?」

スバルはなにか感じ取っていた。

「・・・・・・・・行くぜっ!」

と、リュウセイは右拳に緑の光を纏わせたままスラスターを噴射させて、スバルに急接近した。

「必殺！・・・T-LINKナツコッ！」

そしてスバルに拳を突き出してきた。

「っ！」

スバルはとっさに右手のM950マシンガンを収納して、同じようにして右拳を突き出して、両者の拳がぶつかる。

「くっ！」

ぶつかった瞬間右腕に衝撃が伝わり、その痛みでスバルの顔が引きつるが、スバルは脚部後部装甲を展開して、背面スラスターと同時に噴射してリュウセイを押していく。

「な、なにっ！？」

そしてスバルは強引にリュウセイを弾き飛ばすと、右手に鋭く尖った杭がある武器を展開する。

「げっ！」

それを見てリュウセイの顔が青ざめる。

「手加減はしないよ」

と、そのままスバルはその武器をリュウセイに突きつけた。

「Gインパクトステーク・・・いけえ！」

そしてGインパクトステークをリュウセイの腹部に叩きつけると、トリガーを引いて衝撃を次々と叩き込む。

「ぐはっ！」

全部で六発叩き込まれて、リュウセイは後ろに大きく吹き飛ばされると、地面に叩きつけられた。

「うつ・・・。いてて・・・」

リュウセイは腹を押さえながら立ち上がると、スバルが近くに着地した。

「大丈夫？」

「・・・本人がそう言うか？」

「・・・・・・・・」

「でも、凄いな、スバルは」

「そうかな？」

「そりゃ、向かってくる弾丸を狙って撃って、軌道を変えているんだぜ？こんなスゴワザめったにないぜ」

「・・・僕は普通にやっているんだけど・・・」

「いや、それはお前の感覚だろ・・・」

リュウセイは少し呆れていた・・・

「それで、リュウセイはこのくらいでいいの？」

「ああ。R-1のことについて色々と分かったからな。これから模擬戦を頼むかもしれないから、そのときはよろしくな」

「うん。その時は任せて」

そうして二人は握手をすると・・・

「・・・？」

スバルは何か違和感を感じた。

「どうした？」

「な、なんでもないよ」

スバルは今はいいと思って、気にしなかった・・・

「・・・・・・・・」

スバルは寮の部屋に戻ると、さっきの違和感を思い出していた。

（さっきのはなんだっただろう・・・何か頭に通り過ぎた感じだったなあ・・・）

と、考えながら、スバルはカバンからヒュッケバインEXのデータが入ったデータ端末を取り出して、データを開く。

（クラス対抗戦まであと二週間・・・。それまでEXのT-LINKシステムを少しでも使いこなさないと・・・）

スバルは今後の計画を立てる・・・

その頃・・・

「それで、例の機体はどうなっているんだ」

「ええ。もうロールアウトしているわ。今は稼動テストを行っているから、襲撃の時までには間に合うわ」

「そうか」

と、どこかの暗い一室で誰かが話していた・・・

「しかし、プロトタイプで、しかも無人機で俺が求める性能を発揮できるのか」

「心配しなくてもいいわ、アクセル。プロトタイプと言っても、完成型に近い性能よ。無人機とはいっても、あなたのモーションパターンをA Iに取り入れているわ。そしてデータを元にして色々と改善すれば、あなたが求める専用機の完成に繋がるわ」

「そうならばいいんだがな」

「・・・ところで、あなたのほうはどうなの、アクセル？」

「順調に進んでいる、これがな。既にW 1 5がとある研究所のI Sの奪取に成功している。それとW 1 3がイギリスで開発途中の試作I Sのデータの奪取に成功している」

「そう。そうならばスコールやヴィンデルも喜ぶでしょうね」

「あの二人の喜ぶ顔など、想像がつかんな」

「ふっ、言えているわね」

「とりあえず、俺はしばらく単独で動いているぞ」

「くれぐれも、無茶だけはしないでね、アクセル」

「分かっているさ・・レモン」

そうしてアクセルと呼ばれる男性はその一室を出た・・・

S t o r y 5 特殊能力（後書き）

今回だかぐだぐだになった気が・・・。

Story 6 動き出す計画

クラス対抗戦一週間前なので、IS学園では少し盛り上がりを見せていた。

「・・・・・・はあ」

昼休みになって、スバルはため息をついて購買所に向かっていた。あれから念動力による武装の操作をやっているものも、まだ完全にコツを掴めていなかった。

（あと一週間・・・・。それまで何とかしないと・・・・）

と、考えているうちに、購買所に到着した。

早めに来たので購買所は空いていた。

スバルはそこで焼きそばパンを購入して、近くの自販機でジュース

を購入した。

「・・・ん？」

そうして教室に戻ろうとすると、一人の生徒を見かけた。

生徒は何かを探しているのか、床をあちこち見ていた。

スバルは近付いていくと、床に鍵が落ちていた。

「これを探しているんだ」

と、スバルはジュース缶をポケットに入れて、鍵を拾い上げた。

「あの・・・」

「・・・・・・？」

スバルが呼びかけると、その生徒はゆっくりと振り向いた。

その生徒は少し紫が入った黒い髪で、腰の位置まで伸ばして根元で結んでいた。制服の左胸につけているリボンの色からして、スバルと同じ一年だと分かった。背丈はスバルより少し低い。特徴的といえば、前髪が長く、目を覆い隠していた。

「探していたのって、これですか？」

と、スバルは鍵を生徒に差し出した。

「・・・はい」

と、生徒は手を差し伸べるが、なぜか手探りのようにして辺りに手を動かして、鍵に触れるとそれを持った。

「・・・ありがとう・・・ずっと・・・探していたの」

「そうなんだ」

と、言うと、生徒が手を伸ばしてスバルの顔に触れてきた。

「・・・え？・・・な、何を・・・？」

スバルはいきなりのことに驚いていた。

「・・・そこに・・・いるのね・・・」

目が前髪で隠れているものも、生徒はスバルの存在を確認したかのようだった。

「・・・え？」

一瞬何のことか分からなかったが、すぐに理解した。

「君・・・もしかして・・・目が・・・？」

「・・・うん・・・。私・・・目が見えないの」

「・・・・・・」

「・・・でも・・・目が見えないけど・・・分かるよ」

「・・・?」

「・・・なんとなく・・・あなたの顔が分かる・・・。女の子のよ
うな顔立ちなのね」

「・・・なんで分かったの?目が見えないのに」

「・・・私にも分からない・・・。でも、うつすらと、あなたの顔が思
い浮かぶの」

「・・・」

「あなたの名前は?」

「・・・近衛スバルだよ。一年一組の」

「近衛・・・スバル・・・。あなたが噂のISを動かせる男子なのね」

「うん・・・。君は?」

「・・・向居・鈴・・・・一年三組」
むかい すず

「へえ、三組の人なんだ」

「うん・・・。よろしくね、スバル君」

「よろしく・・・向居さん」

と、手を差し伸べた鈴^{すず}の手をスバルが握った瞬間……

「……………!?!」

すると何かが頭を通り過ぎていった。

「……………どうしたの?」

鈴^{すず}は疑問に思った声で聞いてきた。

「あつ……。なんでもないよ」

「そう……。?じゃあまたね、スバル君」

と言って鈴^{すず}はその場から離れていく。

「……………今のつて……………」

スバルはさっきの感覚を思っていた。

頭の中を何かが通り過ぎていった感覚だった。しかもその際一瞬に起きていたことは……………

「……………あれつて……。向居さんの……。過去?」

一瞬だが、鈴^{すず}の過去らしき光景が見えた。

(・・・でも、なんで?)

ちなみに言うと、リュウセイの時も似たようなことが起きていたが、今回のように光景が映ってはいなかった。

「・・・それにしても・・・向居さん本当に目が見えないのに、どうして普通に歩けるんだろう?」

鈴は特^{すず}に恐る恐る慎重に歩いていたわけではなく、むしろ棒を使^{すず}って前方を叩いていたわけではなかった。

「・・・」

スバルは考えながら、教室に戻っていった・・・

「はぁ・・・今日も疲れたなぁ・・・」

と、リュウセイは背伸びしながら寮の部屋に戻っていた。

そしてリュウセイの部屋がある廊下の角を曲がったときだった・・・

「うわぁっ！」

「きゃっ！」

角を曲がった瞬間に誰かとぶつかり、床にしりもちつくと、何かが床に散乱した。

「す、すまねえ。大丈夫か？」

と、リュウセイは立ち上がるとぶつかった人を見た。

「い、いいの……。私もちよつと前を見てなかったから」

と、前にいたのは女子生徒で、立ち上がるとリュウセイに謝った。

女子生徒は少しくすんだ金髪をしており、それを背中位置まで伸ばしており、左側には蝶を模した髪飾りがあった。瞳の色は水色と、外国人のように見える。身体のスタイルは結構よく、背丈はリュウセイとほぼ同じで、胸がやけに大きかった。

でもって、辺りに散らばっているのは、何かをコピーした紙と、本であつた。

「……あれ？これって……」

と、リュウセイはその本を手にとって見る。

「これって最近人気のゲームの攻略本じゃないか」

「え？あんた知っているの？」

「ああ。俺もこれやっているんだけど、攻略本が出ているのは初めて知ったな」

「へえ……」

と、女子生徒は何か掴んだかのように、リュウセイを見る。

「あんたって、ゲーム好き？」

「……ああ。俺ゲームが大好きなんだ。まあ今はテレビでやるのは持っていないけど、携帯ゲームのほうを主にやっているな」

「……なるほどね……」

「……こんなことを聞いてるけど、君は？」

「大好きよ。ゲームがないと生きて行けないほどにね」

と、女子生徒は自慢げに言っていた。

「そ、そこまで……。まあ、俺も似たほうかな」

「あなたも……。なんだか、気が合いそうね私たち」

「そうなのか？」

「どうも、他の女子はあんまりゲームに興味がないのよね。話し相手がいないって困っているのよ」

「そうなんだ」

「だから、よろしくね」

「ああ。俺の名前は伊達リュウセイって言うんだ。よろしくな」

「私は榎崎・星奈・かしわざき・せいな。一年三組よ」

と、二人は手を握って握手した。

「隣のクラスなんだ。俺は2組だ」

「へえ。．．じゃありユウセイ。ちょっとばかり私の部屋でゲームトークでもする？」

「ああいいぜ。ゲームで話す相手が出てよかったぜ」

「私もよ」

と、二人は一緒に歩き出した．．．

その頃スバルは．．．

「・・・・・・・・」

スバルはイスに座ってさっきのことを考えていた。

紐を解いた髪はさつきシャワーを浴びたばかりなので若干濡れていた。

（何なんだろう・・・。あれって・・・）

と、考えるも、今考えてもどうしようもないとして、イスを立つと部屋の掃除を始めた。

布切れで机の上や棚の上を拭いて埃を取り、散らかっているものをまとめた。

「それにしても、ゼオラってなんでこんなに物を散らかすんだろう・・・？」

そんな疑問を口ずさみながらも、部屋の掃除を終えた。

「ただいま」

と、ちょうどいいタイミングでゼオラが帰ってきた。

「お帰りゼオラ。それにしても今日はどうして帰るのが遅くなったの？」

「ちよっとね、色々あったのよ」

「ふーん」

「・・・それにしても・・・相変わらず私が帰ってきたときにはいつも綺麗になっているわね」

と、ゼオラは綺麗になった部屋を見て言う・・・

「そりゃあ、執事をやっていたときはこうして綺麗にしておかないといけなかったんだよ」

「へえ・・・。習慣付いているんだ」

「まあね」

そうしてゼオラはカバンをベッドの横に置くと、ベッドに腰掛けた。

「・・・ねえ、ゼオラ」

「なに？」

スバルは少ししてゼオラに聞いてきた。

「・・・この学園って、いろんな人がいるんだね」

「どうしたの？急にそんなことを聞くなんて」

「・・・なんとなく・・・。ゼオラはどう思っているの？」

「そりゃ、私もそう思っているわよ。だって世界中からISを学ぶために色んな人が来ているからね」

「・・・それって、障害を持った人も、含まれるのかな」

「え？」

ゼオラは予想外なことを聞いて少し驚く。

そしてスバルは鈴^{すず}のことを話した・・・

「・・・そう・・・そんなことが」

「・・・」

「・・・でも、障害を持った人も少しはいるわよ。そんなに気にすることでもないわよ」

「・・・」

「・・・それより、ついに後一週間ね」

「え？あ、そ、そうだね」

スバルは少し驚いた様子で返事をした。

「でも、やっぱり少し不安かな」

「大丈夫よ。スバルなら勝てるよ、きっと」

「そう言われても……。それに対戦相手の鈴^{りん}も中国の代表候補生。セシリアのようにいかないよ」

「まあ確かにそうだけど、スバルはそれでも代表候補生のセシリアに勝てたじゃない。今回も勝つ意気込みで行けば勝てるよ」

「・・・意気込みって・・・それで勝てたら苦労はしないと思うけど」

「そ、そうよね」

「・・・でも、僕もそれなりのベストは尽くすよ。クラスの代表になったからには、期待に応えないと」

「それでいいのよ。そうやって勝てるって思えば少しは違ってくるのよ」

「そ、そうかな？」

「そうよ。だから気を引き締めて」

「う、うん」

そうして話はもう少し続いた・・・

「……おつ、結構手ごわいな……」

「でも、これで動きを止める」

と、リュウセイと星奈は部屋にてゲームをしていた。

星奈は部屋に一人であり、部屋にはテレビゲームがあった。

ちなみになんのゲームかと言うと、今はやりの『一狩り行こうぜ!』のあれ……

「よしっ!」

と、リュウセイはガッツポーズを取った。

「何とか倒したわね……。それにしてもリュウセイは強いよね」

と、星奈は顔を上げてリュウセイを見る。

「まあな。でもこいつは中々でこずっていたんだ。でもやっぱり二人だと違うな」

「そうね。一人より二人のほうがいいわね」

と、楽しそうに話していた。

「……あつ。もうこんな時間か」

と、リュウセイが時計を見ると、もう夜の十時半だった。

「時間が経つのが早いわね・・・」

「そうだな・・・じゃあ俺帰るな」

「そう・・・じゃあまた明日ね。それと、明日は別のゲームをしましょうね」

「ああ」

と、リュウセイは席を立って、部屋を出た・・・

その頃・・・

「ところで、アクセルはまた単独行動か？」

「ええ。彼も何か調べたいことがあるのでしょーうね」

と、どこかの建物内の一室で男女二人が話をしていた。

「しかし、あんまり外をうろつかれては困る。まだ我々は表舞台に

立つ時ではない」

「そうわね。でも、アクセルもその事を分かっているわ。心配することはないわ、ヴィンデル」

「そうだいいんだがな・・・ところで、例の機体はどうなった？」

「もう戦闘に出せるようになったわ。後は襲撃地点付近まで輸送するだけよ」

「そうか・・・」

「ところで、襲撃地点を聞いていなかったわね。どこを襲撃させる気なの？」

「ああ。あれのテストをするのには最適の場所だ。そう、その場所は――」

――IS学園だ・・・。

Story 6 動き出す計画（後書き）

オリキャラが多数登場とありますが、オリキャラの大半はどっかのアニメキャラがモデル（っていうか、そのまんま？）であります。まあ容姿のイメージや名前、設定などでどのキャラクターをモデルにしているか分かりますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277y/>

IS - インフィニット・ストラトス - 希望と絶望の力

2011年12月18日12時48分発行